あたたかい涙

田後 寛子［東京都］

白い洗面器に手を入れた途端、手の甲から赤い小さなつぶが現われて、やがて細い何本かの筋となって浮き上がってきました。

さっき薪割をしたときに、ぴり（ぴり）／＼とひび割れしたところから滲（にじ）み出てきたのです。その両手がいとおしく、そっとエプロンで包みました。

私はこの春、働き乍（なが）ら定時制高校へ通うことを決心して、この家でお手伝いさんとなったのです。大きなお屋敷では思っていたより、厳しく、時に心が折れそうになりました。

終戦の時、私は九才でした。中国から引揚げてきた霧島の山の麓（ふもと）、開拓地の暮しは、いつまでも貧しく、食べ物も充分ではありません。

「そんなに勉強したいのなら」と許してもらった両親にも申し訳なく帰ることすら出来ませんでした。

その夜は仕事を終えて戻る足も重く、黒光りした階段の灯（あかり）もぼんやりとしていました。

襖（ふすま）をあけた途端、ふわっと甘い香、あわてて灯をつけました、なんと机の上にケーキ!!白いクリームの上に缶づめの大きなさくらんぼ、そのまわりにミカンが並んでいました。下宿されていた先生からの「頑張っているご褒美です」と手紙が添えてありました。

あぁ見ていて下さったのだ、さっき迄の、沈んだ気持はふっ飛び嬉しくなりやがてあったかい涙が溢（あふ）れてきました。

私は先生のようなやさしい気持をもっているだろうか？　自分の事しか考えられない生き方をしていないか？　自分自身に問いました。

それからの私は御飯を炊き乍ら灰の中に、小枝で字を書き、盥（たらい）の中の泡でガラスに図を書き、風呂に水を汲み上げ乍ら単語をおぼえ、

仕事は言われる前にやる、知ってるかぎり友達に教える、どんな人にも何の仕事をしている人にもやさしく決して卑下しない。

「先生ありがとうございました、私、今日も愛顔（えがお）で患者さん一人（ひとり）／＼と向き合って、一日も早い回復のお手伝いをしています。」